

誰の視点から復興を描くのか

— 被爆者が語る〈私たちの復興〉から広島「復興」を捉え返す試み —

From whose perspective should the 'reconstruction' be discussed?

— Revisiting the reconstruction of Hiroshima through the story of 'our reconstruction' by an A-bomb survivor —

桐谷多恵子*1

Tacko Kiriya,*1

従来の広島「復興」史の主潮流は行政を「復興」の主たる行為者として捉えてきたため、生活当事者としての被爆者の戦後史が後景に追いやられてきた。本稿では、一人の被爆者、切明千枝子さんが筆者との応答の中で発した「私たちの復興」という言葉を手がかりに、彼女の個人史を描くことを通じて、被爆者にとっての復興へと接近を試みる。切明さんは、「復興」言説に対し三つの違和感を有しており、その違和感を再確認し、今後のあり得べき「復興」の歴史叙述について思いを巡らせる過程を経て、「私たちの復興」という言葉を獲得するに至った。そのような「復興」の記述は、暴力によって非人間化された人間が、人間的で豊かな生を取り戻そうとする営為として描写されるものとなるだろう。

キーワード: 日本語 (5語以内) 広島、原子爆弾、被爆者、都市計画、復興

Keywords: 英語 (5語以内) Hiroshima, Atomic-bomb survivor, City planning, reconstruction

1 はじめに

1.1 広島「復興」に関する研究動向

筆者は広島戦後史（とくに民衆史）を研究している。これは2003年4月に広島の大学院の博士前期課程に進学して以来、継続している課題である。とくに戦後初期に関しては文書資料が少ない点、および、公の機関に所蔵されている資料のみでは民衆史を描くことが難しいため、必然的に聞き取りに頼らざるをえなかった。このような研究的背景により、筆者は2003年5月より被爆者に対し聞き取り調査を開始した。その聞き取り調査のごく初期のころに、とくに意識せずに筆者が広島戦後「復興」を称賛する言葉を述べたとき、聞き取り相手の被爆者が「復興」への違和感を口にした。これは、当時の筆者には大きな驚きと共に衝撃であった。この後も聞き取りの中で同様のことが起こった。2005年に一度、広島を離れ、東京の大学院の博士課程に進んだ後、2010年4月から再び広島に暮らすことになった。関東での生活に対し、広島で暮らしていると日常の中で頻りに被爆者と出会う機会を持つことが出来る。広島での研究生活の再開に伴い、再び被爆者にとっての復興という問いに直面することとなった。（なお筆者は2016年に再び広島を離れている。）

広島「復興」に関するこれまでの研究は、都

市計画やそれに関連するテーマに集中する傾向があった。この分野で大きな蓄積を為しているとは評価されているのが石丸紀興の研究である¹。彼の研究は、壊滅した都市がどのように再建されたのか、主に都市計画の視点から捉えたものである。そして再建に取り組んだ多くの都市の中でも広島市の「復興」が奇跡的な発達を遂げたとは評価している。他には、建築学の中谷礼仁は、「復興」において丹下健三の設計した平和公園が果たした意味を強く称揚する²。一方、米山リサは丹下健三の平和公園デザイン案における戦中と戦後との継続性を指摘し、そこにはナショナリズムの問題が内在していると「聖地ヒロシマ」の復興を批判した³。近年では、この米山の「聖地ヒロシマ」批判を受け止め、平和都市の「復興」が成り立つまでの過程での力学を描く研究が増えている⁴。このような研究状況の中で、筆者は、被爆者にとっての復興とは何を意味するのかを模索し続けてきたが、筆者のこれまでの研究では、都市計画に対する市民からの批判を描くことに留まっていた⁵。

以上、これまでの研究の主な潮流が採っている立場は、広島「復興」の主たる行為者を行政とし、その視点から都市計画や都市の歴史を描くというものであった。（その「復興」に批判的な研究であっても、ひとまずは「復興」をそのようなも

*1 長崎大学核兵器廃絶研究センター客員研究員

Visiting researcher, Research Center for Nuclear Weapons Abolition, Nagasaki University

のとして理解している。)研究史において都市計画論的「復興」言説は更新され続けている。しかし、そこに住む人びとの歴史は背景に追いやられたままである。被爆者の戦後史を軸に据えて復興の歴史を叙述するにはどうしたらよいだろうか。

1.2 「私たちの復興」

上述したように、筆者は、被爆者への聞き取りを行う中で、復興をどのように捉え、被爆者を軸とした広島復興史を描くのか、悩み模索してきた。そして、ある被爆者と何度も繰り返し対話を重ねる中から、一つのヒントをもらった。「私たちの復興」という言葉である。

この言葉の主は、切明千枝子さん。(「さん」という敬称は研究論文らしくないが、筆者と彼女との関係性を踏まえて書くとき、この書き方が最もふさわしいと判断した。)1929年広島市生まれで、1945年8月6日には爆心地から1.9キロの距離で被爆し、戦後も広島で暮らしてきた。切明さんと最初に出会ったのは、筆者が大学教員として担当していた2012年の後期の講座であり、彼女はそれを受講していた(大学と広島市による共催であったため、学生に限らず市民も参加していた)。このような講座(もしくは講義)に被爆者が参加していることは広島では特別な光景ではなく、40名ほど受講者がいると2、3名は被爆者が参加していた。筆者も何度も同様の講座の講師を経験しているが、概して被爆者たちは熱心に受講し、また自らの体験や経験を通しての意見を率直に伝えてくださった。当の生き証人の前で被爆や原爆について語ることは、筆者にある種の緊張を与えていたが、同時に、被爆者の人びとが探求していることの一部を知る機会にもなっていた。切明さんは、2012年11月10日の講座の後、筆者に質問にやって来て、それが筆者と切明さんとのその後の交流の端緒となった。(本稿執筆まで32回、聞き取りをしている。)

筆者は彼女との対話の中で、たびたび丹下健三が設計した平和記念公園や都市の「復興」をどう思うかという質問を投げかけてきたが、大抵は一言、二言の淡泊な回答しか返ってこなかった。一方で、被爆した後に、家をどのように再建したのか、学校での教育の再開や、何を食べて暮らしてきたのか、自らの日常生活の再建について話を聞き始めると熱心に語り、発話に枚挙のいとまがなかった。そして、筆者が戦後の生活史を熱心に聞

きはじめると切明さんは目を輝かせながら「私たちの復興を描いてくださるのですね」という言葉を発したのであった。「私たちの復興」。それでは、筆者がこれまで見てきた「復興」は彼女ら／彼らの「復興」ではなかったのか。

1.3 本稿の目的

本稿での筆者の課題は、切明さんが発した「私たちの復興」という言葉を手がかりに、彼女の個人史を描きつつ、個人にとっての復興、被爆者にとっての復興とは何か、主体(主語)を明確に据えたうえで復興の内実を考察することである。それは、彼女と筆者との間でなされた相互的な応答により形作られたものである／となるだろう。

今後、積極的意味を込めて〈私たちの復興〉と表現する。〈私たちの復興〉とは、切明さんと筆者の相互応答の中で生じた新しい視角であり、被爆者にとっての復興を考察するうえで重要な意義を持つだろう⁶。

2 切明千枝子さんの証言の中の「復興」——切明さんと筆者の応答過程から

2.1 切明さんの体験講話と戦前を語る意味

切明千枝子さんは1929年11月、広島市に生まれ、皆実国民学校を卒業し、県立第二高等女学校(第二県女)在学中の15歳で被爆した。その後、第二県女を卒業して広島県立女子専門学校に進学、卒業後も広島市内で生活してきた。

切明さんが最初に自身の被爆体験を証言したのは、被爆から30年経ったころであったという。東京の中学校のある教員から、第二県女の原爆慰霊碑に参る生徒たちに話をしてほしいと頼まれてのことであった。とはいえ彼女も最初から承諾した訳ではなく、何度も「私には話せません」と断って来ていたのだが、体験を話す人が次々リタイアしていく中で、この学校の分だけ承諾したという。

彼女がより多くの人たちに語り始めるのは2014年のことである。被爆70年を前にして広島県原爆被害者団体協議会(広島県被団協)から体験を語ってほしいとの要請がきっかけとなり、その後は依頼があればなるべく応じるようになった。

彼女は体験手記を書いておらず、証言も原稿なしで行なうため、文字化された彼女の原爆体験は、証言を文字起こししたものしかない。それを基に彼女の語りの流れを整理すると次のようになる。

①戦前の軍都広島、②軍国少女としての反省、③

原爆で大事な人を失う、④生き残った後ろめたさで、死んでしまいたいと考えたこと、⑤生き残った意味：死んだ人のために語る。

筆者はそもそも広島市の被爆者の戦後史を調査したいと考えており、切明さんにも被爆体験と戦後史について話してもらいたいと思っていた。しかし、切明さんの話は戦前から始まり、戦中へと至るが、なかなか被爆から戦後へと至らない。しかし、それは幼少期へのノスタルジーといった類ではないことはすぐに了解された。それは「軍国少女」（切明さんは「皇国少女」という言い方をすることもあった）としての自分、そしてそれを育てた「軍都広島」を語らなければ、被爆体験も戦後も語るができないとの認識から出ていたものであることが、聞き取りを続ける中で分かってきた。彼女自身の体験講話の構成からも、それは見て取ることが出来る。「復興とは何か」という課題に辿り着くためにも、私たちは彼女の戦前からの個人史を（たとえ駆け足であっても）追うことが必要である。

2.2 「軍都広島」の「軍国少女」

切明さんは、明治の頃から広島が「軍都」として発展してきたことを指摘し、自分が物心つくころには、軍と市民の生活が密接に関わっていたと述べた。軍と密接に関わる日常生活ということはどういうことかと尋ねると、広島市の街では陸軍の重要な施設が多く存在しており、たくさんの兵隊が居住していたという。日常で兵隊を目にし、接する機会も多かった。もちろん、切明さんをはじめ広島市の住民や学生・生徒は軍施設に勤労働員されたり、働いたりしたという。日中戦争がはじまると陸軍専用の棧橋が作られ、軍用船で兵隊たちが戦地（中国大陸や南方戦線）へ送られていった。出征する兵士が船に乗り込む宇品港の近くに住んでいたため、小学生の切明さんは学校から毎日のように小さな日の丸の旗を持って宇品港まで見送りに行っていた。兵隊は4列縦隊で港まで行進し、一般市民が「万歳、万歳！！」と声を上げて毎日のように兵士を送ったというのである。その時の兵隊たちへの激励の言葉は「死んで帰りなさい」という言葉であった。戦争へ送る兵隊が足りなくなれば、役場の人が召集令状を持ってやってくる。「あまりに命が軽く扱われるので、召集令状は『1銭5厘』のはがきに例えられ、そんなに軽いものだ」という例えで用いられていました。命なんて本

当に軽いものでした。」

そんな日常の中で彼女の「兵隊さん、万歳！」という歓声を止めたものの存在があった。それは、戦地へ送られていく馬たちの存在だったという。当時、港に多くの軍馬がいて、輸送船に乗せられていく中で、クレーンで引き上げられた際に「ヒヒーン、ヒヒーン」と哀れな声で鳴いており、「この馬たちは危ないところへ連れていかれるということが分かって、嫌がって鳴いているんだ」と考えたという。そう思うと、子供ながらに可哀そうでならず、泣いてしまったという。彼女が小学校（国民学校）2、3年生の時であった。

その後、彼女は軍国主義の時代の空気を吸って育っていった。1942年に県立広島第二高等女学校に入学した頃から、学生も勤労奉仕に出かけるようになった。状況はどんどん変化していき、1944年ころになると授業はほとんど行われなくなり、学生たちは勤労働員へ出され、軍事教練に従事させられていった。軍事教練とは具体的にどのようなことを行ったのか尋ねると、分列行進や薙刀の訓練、手旗信号の訓練や手榴弾の投擲訓練、「トン・ツーの無電を打つ訓練」等であったという。

勤労働員では、切明さんは3年時に被服支廠において軍服の洗濯に従事した。新しい生地が不足していたので、軍服の古着を再利用していた。銃弾の穴が開いていて、血染めの服を洗う作業の中で、「これを着ていた兵隊さんたちは入院しているのか、もしくは死んでしまったのか」と思うようになった。先生に思わず「日本は大丈夫なんですか」と質問した際に、厳しく叱られたという。その時の教員の言葉を尋ねると、先生は「負けるはずがない。何を言っているんだ、神風が吹いてきつと勝つ」、それを疑うような発言が憲兵の耳にでも入ったら「子供でも容赦なく捕まるぞ」と注意を受けたという。自由に発言することができない日々であり、日々の生活は「軍隊式の暴力」に満ちていたという。彼女は、当時の様子を思い出しながら、「本当に怖いことです」と繰り返し語りながら、一つのエピソードを聞かせてくれた。「軍がのさばっていた街です。軍閥の将校たちはいばり腐っていました」。ピラミッド型社会の下方の階層にいる弱い立場の人びとにはつらい時代であった。体調が悪い女学生の一人が、当時、禁止されていた広島市内の路面電車を利用して通学した際に、それを教護連盟の人に目撃され、学校へ連絡が入った。教護連盟とは、退職した教員で結成さ

れた団体で、男女不純行為等がないか監視していた。禁止行為を行っている学生を見つけると、学校へ連絡がいくようなシステムになっていた。その女子学生は体調が悪く、市内から交通機関を利用したという理由を伝えたが、「問答無用」と学生の前で叱咤され、思い切りビンタを受け、倒れこんだという。そのような情景を目の前に、自分を含めた他の学生は震えあがっていたこと、なるべく余計な言動はせずに過ごそうと思ったことを話した。

その後、筆者は思わず、当時の女学生たちにとって日常で楽しみはあったのかどうか質問をした。切明さんは顔をあげ、「あの時代でも女学生たちはおしゃれに心を砕いて研究していましたよ」と答えた。筆者が「おしゃれですか？」と驚いて聞き返すと、切明さんはくすくす笑いながら、「おしゃれしていたんですよ！」と返した。アジア・太平洋戦争が始まると日常を取り巻く環境は様変わりしていく。彼女の通っていた学校はセーラー服だったが、戦争が激しくなってくると、「敵性のスカートは動きにくい」ことを理由に禁止されていく。「モンペを履いてこい」と言われ、上着はセーラー服で、下はモンペという出で立ちで登校するようになった。しかし、「だんだんモンペも乙女たちのおしゃれへの探求で進化していった」という。おしゃれな学生は「お尻がだぶだぶに見えないようにしたり、足の先が少し広がっているように作ったり」、上着のセーラーは襟が汚れるから、襟カバーを創っていたが、「色々と考えてね。ボタンを布でくるんで、少しでも綺麗に観れるようにしたり、それを互いに見せ合って楽しんでましたよ。どんなに食べるものがなくても、着るものがなくても、おしゃれ心は残っていましたね。乙女はここを砕いておしゃれの研究をしていました」。このように戦中の生活史の聞き取りは5回続いた。

2.3 被爆体験と「友達を焼いた日」

1945年8月、切明さんは学徒動員で広島地方専売局の煙草工場で働いていた。6日は、足を痛めていたので、朝礼に参加してその後病院へ向かった。比治山橋東詰から橋を渡ろうとしたが、足が痛く、少し休もうと橋のたもとの小さな木造の建物に立ち寄り、汗をぬぐったところで、目もくらむような閃光が背後から放たれた。「その光の凄さを形容することが難しいのですが、太陽が落ちてきたのではないかというほどの明るさでした。」そ

の直後に何かに叩きつけられて気絶した。強烈な爆風であった。どれほど時間が経ったのか、気がついた時は建物の下敷きになっていたという。倒壊した建物から自力で這い出たところ、辺りは真っ暗であった。そこで周囲を見渡して「あぜんとした」。風景が一変していたからである。橋の向こう側の街が火の海となっていた。そこから人びとが叫び声をあげて逃げてきた。「この世の地獄絵をみているよう」であった。その後、煙草工場に戻ることにして向かったが、道路がなくなっていた。家も倒壊し、街の景色が変貌していたが、「なんとか」煙草工場へたどりついた。

煙草工場は火災を免れていたが崩れていた。建物の中からクラスメートが這い出てきて「助けて」と救出を求めた。額から血が噴き出していたので、救急カバンから三角巾を出して、止血した。するとクラスメートが「あなたもケガをしているから」と切明さんに突き刺さっていたガラス片を抜き、赤チンを塗ってくれた。

二人で学校に向かうことに決め、切明さんは重傷のクラスメートに肩をかして背負うようにして学校を目指した。校舎に入ると校長先生や煙草工場にいた教員、そして5、6名のクラスメートがいた。みんなで無事を喜び合った。昼過ぎになると、続々と下級生たちが学校へ戻ってきた。顔にやけどをおって、腫れ上がって識別ができない。学校にいる人たちで救護にあたった。昼敷きの作法教室を救護所として使用したが、間もなく負傷者で溢れた。物理化学教室の机をベッド代わりに寝かせたが、ここも負傷者で埋まり、廊下に寝かせていった。治療といっても救急袋にはいつている火傷用の油薬を塗っていたが、すぐになくなり、調理用の天ぷら油を探しだし、患部に塗っていった。被爆した人を収容しきれなくなると、運動場の木陰に寝かせていった。

そのうちに、ひとりまたひとりと「おかあちゃん、痛いよ、助けて」と泣きながら、死んでいく状況へ変わった。夏の暑い時期なので、放っておけないと教員の指示で一人一人が横たわれるくらいの浅い穴を掘り、集めた材木を下に敷き、遺体を乗せて、陸軍船舶部隊に動員していた下級生がもってきた油を入れて火をつけた。「人間が焼けて、骨になるまでの悲惨な状態は言葉にできません。胃や腸が破裂するパンパンと大きな音がして、手足も動くのです。私がびっくり仰天していると先生から『見るな!』と言われました。」しかし、

身体が金縛りのようになって目を背けることができず、一部始終を目撃してしまった。綺麗な遺骨が残っていることが確認できたとき、「金縛りが解けて」、涙がボロボロと出てきた。泣きながら、遺骨を拾い、名前と亡くなった日付を書いて、校長室の大きな机に並べていった。次から次へと並べていったという。しばらくして、亡くなった学生の両親が探しに学校までたどり着き、我が子が骨になっているのを見て泣く。廊下の陰に隠れて、切明さんたち生き残った学生たちも泣いた。「見てはいけないものを見てしまった悲しみといひましようか。膨大な悲しみに溢れていました。」

2.4 敗戦を迎えて

切明さんが、その後、学校から自宅へ戻ってみると「家がめちゃくちゃに崩れていた」。筆者が住むところはどうしたのかと尋ねると、「最初は野宿ですよ！よその家の畑に、4本の柱を立てて、そこに蚊帳を吊って、地面に畳を敷いて寝ていました」と答えた。夜空を見上げると、まだ街が焼けていて、西の空は赤かった。火災が続いていたからだ。一方で東の空は、流れ星が一晩中流れていたという。その流れ星を切明さんは「ああ、死んだ人が流れていったんだ」と涙をためながら見つめていた。「忘れられない光景の一つです」と語り、原爆後の風景を述べた。1945年8月15日を過ぎてから軍隊が解散になると軍の施設は空き家同然となり、人びとはそこへ行って、必要な材料を取ってきて、自分たちでバラック小屋を建てたという。焼けた瓦で屋根をつくったが、「焼け瓦は、雨が漏って苦労した」という。

8月15日の後、彼女は「敗戦国ですからね。救援なんてこないだろうと思いました。自力で立ち上がるしかないな」と考えていた。しかし、その中で「75年間草木は生えない」という記事を新聞で読んだ時は恐怖に震えたという。あれほど多くの人びとを殺戮した「新型爆弾」は、「戦後も自分たちを襲ってくるのか。ましてや、私たちの故郷の大地までも奪うのか」と、やりきれない気持ちに追い込まれていた。彼女はすぐに父親に「お父さん、田舎へ逃げよう」と懇願した。しかし、父は「逃げるところなんてどこにもありません。ここで生きるしかない」と応え、諭すように何度も「ここで生きるしかない」と語ったという。父のこの言葉で切明さんは家族と共に「ここで（広島で）生きていくという覚悟」を固めた。

しかし、原爆投下から1か月が過ぎた頃（1945年9月）、彼女の体調は著しく悪くなる。まず髪が抜け始め、歯茎からの出血、血便が出て、身体に紫色の斑点が表れ、高熱に苦しめられた。そして、身体の不調と共に、精神的にも追い詰められていたという。あの時、「なぜ自分は生き残ってしまったのか。友人や下級生とともに死ななかったのか。生き残るよりも皆と死んだほうが良かったのではないか」。身体と精神の両方から生きる意欲を奪われていった。その時の心情を彼女は次のように語った。「正直なところ、原爆症が出たときには、ホッとしたような気持ちでした。『死ねば楽になれる』と思っていたんです。」

そんな彼女を死の淵から救い出したのは両親であった。両親は必至に看病を行ったという。特に彼女の母親は、「死んではいかん」と言い、原爆症には鯉の生き血を吸ったら効くという噂を耳にすると、母親は急いで自分の着物と交換して農家の人から鯉をもらってきた。早速、鯉の頭を切っても血が出てこず、その鯉は鑑賞用の緋鯉だったが、味噌汁にして食べたという。母は、ドクダミが良いと聞けば、郊外まで行って手に入れて、煎じて彼女に飲ませた。必死に「生きよ、生きよ」と語りかけ、看病する母の思いが通じたのか、彼女の体調は次第に回復していき、気力も取り戻していったという。彼女はその時の状況を思い出しながら「私には看病してくれる家族の存在がありましたので助かりました。しかし、そういう手当てのない人びとは次々と亡くなっていきました。弱い者、貧しい者が真っ先に、戦争の犠牲になるんですね。もっとしっかりした救援があれば、助かる命があったと思います。自力で生き延びるしかありませんでした」。3か月程は重篤な状態で寝込んでいた。

家族の看病によって生かされた彼女が、「自分自身で生きる意欲を取り戻したのはいつ頃なのか」、筆者は難しい質問であることを承知で訪ねてみた。彼女は「もう少し生きてみようと思った体験があります」と語った。年が明けて（1946年の）春を迎えた3月か4月の頃であったという。陸軍運輸部の宇品凱旋館でコンサートが開かれた。このコンサートについては記録的な資料にたどり着けていない状態であるが、切明さんが「生きてみよう」という意思を取り戻した「大事なコンサート」であったという。おそらく引き上げ援護局で働く母親を経由してコンサートに参加したのだろうとい

うことである。彼女は、上着はセーラー服を着て、モンペを履いて、という恰好でそのコンサートへ一人で参加した。コンサートの中で、諏訪根自子というバイオリニストが演奏を行った。その諏訪の奏でる音色に、「世の中に、こんな美しい音楽があるのか」と驚いたという。それまで彼女が知っていた音楽といえば「軍歌」であり、その軍歌はいつも国のために勇ましく命を捧げる歌であった。「花もつぼみの若桜 五尺の生命 ひっさげて 国の大事に 殉するは 我ら学徒の 面目ぞ」などと歌い、「国のために命を捨てよ」という内容であった。「軍歌を皆で合唱すると、酔っていくんですね。それでいつの間にか『命を捨てることなんて何でもないや』なんて思えてくるんですよ。」しかし、諏訪根自子の奏でる音楽は、今まで聞いた音楽とは全く違っていった。「こんな綺麗な音楽が世の中に存在するのなら、もう少し、生きてみようと思ったんです。」生きる気力を失っていた彼女にとって『生きてみよう』と思うことができたとても大事な出来事であったという。彼女はその音楽で「人間である自己を取り戻した」と語った。それはつまり、戦中から原爆被爆にかけての時期の彼女は非人間的な世界へと追いやられ、生きる気力を失っていたということになる。彼女自身が振り返って語るように、美しい音楽に触れて、人間として生きていく欲びが沸き起こり、「再び生きていこうという意欲」を取り戻した。この歴史的瞬間が、彼女にとって復興の原風景だったのである。

3 「復興とは何か」から〈私たちの復興〉へ

3.1 「復興とは何か」

切明さんが生きる意欲を取り戻し、復興の原点に立ったところで、一旦彼女の個人史から離れ、被爆者と復興をめぐる筆者と切明さんとの現代の対話に移りたい。

筆者は、広島「復興」というテーマをどのように分析することが可能か、そして望ましいのかという悩みを、聞き取りの範疇を越えて切明さんにたびたび吐露している（聞き取りの録音記録より）。特に被爆生存者にとって「復興」というものが何か、分からなくなっている点を幾度も切明さんに尋ねている。切明さんも、「復興とは何か」、「こんなに難しい問いはないですね」と言って、一緒に考えてくださった。

彼女は、戦後間もなくして「復興」という言葉が特に新聞記事や行政の広報誌などの中にスロー

ガンのように多用されていたことを覚えていた。そして、彼女たち広島で生活をする市民たちも「復興」という言葉を戦後しばらくは口にしていたという。

しかし、「実際にどういう意味で『復興』という言葉を使っていたのかと聞かれると、心許ない」と話した。筆者があまりにたびたび「復興」についての質問を重ねたため、切明さんも辞書で調べてみたと言い、笑いながら、「『復興』という言葉は、戦後あんなに使っていた言葉ですのに、辞書を引いたこともありませんでした」と話した。切明さんは、辞書には「元に戻す、復する」という意味と同時に「興す」という意味があり、「もっと栄える」という意味もある、と筆者に話した。ここで私たち二人の共通認識として次の質問が浮かんだ——原爆が投下される前の日常に戻れば「復興」になるのか——。つまり、切明さんが語った戦中の「軍隊式の暴力」の日々に戻ることが「復興」なのか。彼女は首を横に振りながら、「いえ、それは違いますね」と語った。

3.2 「復興祭」と学校「復興」運動

「復興」という言葉から切明さんの個人史を手繰り寄せたとき、「復興」と云えば、二つほど思い出すことがあります」と彼女は語った。

「まず翌年の夏(1946年8月)に開催された『復興祭』についてです。私もその『復興祭』に参加したんですよ。広島市中は瓦礫がいっぱい、まだ焼け野原でした。その瓦礫のなかに多くの人がぞろぞろと集まり、参加者たちは『平和が来るんだ!』などと声をあげていました。」行事は午前と午後の部に分かれていたようで、午前中は死者を偲ぶような催しがあり、参加者の多くは「泣いていました」。その時の状況を思い出しながら、「生き残った人びとは悲しみを抱えた人ばかりでしたから」と説明を加えた。一方で午後の部は、全く違う雰囲気であったという。「花火をどんどん打ち上げて、まるでお祝い事やお祭りのように開催していました。」切明さんを含めて、参加者たちの内情は、「生き残ってしまったという気持ちを紛らわす、というか、生きていかないと仕様がな、という気持ちだったのではないのでしょうか」と述べた。

もう一つの出来事は「学校を復興しよう」という取り組みである。1946年、学生が主体となって「学校を復興しよう」と資金集めをしたことがあ

ったという。このとき切明さんは広島県立女子専門学校へ進学していた。具体的な運動としては、「磯の花」という「ふりかけ」を手作りし売ったのだという。京橋川と海（広島湾）の境界に「アオサ」という青海苔が自生していた。「それを女学生たちで採取して、乾かし、七輪で香ばしくあぶり、両手で揉んで粉状にし、焙烙で炒って、食塩と胡麻を混ぜ合わせて、ふりかけを作り」、瓶につめ、「磯の花」というラベルを張り、「学校の復興資金のために」と言って「売り歩きました」。また、「スイートポテト」も作って、宇品の造船所跡や当時は引揚援護局という厚生省の役所になっていた陸軍運輸部跡地に売りに行った。「売れましたか？」という筆者の質問に、「それが、飛ぶように売れましてね、完売でした。『学生の手作りじゃそうじゃ』と皆さんが面白がってね」。売り上げは学校を再建する費用に当てられた。原爆で破壊された校舎に「窓ガラスを入れたい」「冬が来るのを心配せずに勉強がしたい」というのが学生たちの切実な願いであり、こういった学校の再建を「復興」と表現していた。

3.3 〈私たちの復興〉と「復興」への違和感

〈私たちの復興〉とは、筆者と切明さんとが何度もやり取りする中で浮上してきた、仮説的な表現である。そして、〈私たちの復興〉を語る際に、彼女が幾度か繰り返した事柄がある。それは、原爆後の広島の人びとを「誰も助けてくれませんでした」ということである。そのため被爆者が「自力で」復興に取り組まなければならなかったという。被爆者自身による団体の結成についても、「日詰忍さんという人が『被爆者自身が立ち上がらないと誰も何もしてくれないよ。上を待ってっちゃダメよ、自分たちで作らなければ』と訴えて」、1953年に「被爆者の地域の会」が結成されたのだという。「日詰さんは、ご主人を原爆で亡くし」ていた。会の中心は女性たちが担っており、切明さんの母も参加していた。

このような1940～50年代があった一方で、近年の広島に対して世界の紛争地から向けられる期待がある。廃墟から「復興」を果した街として「復興のモデルケース」として広島を捉えたいという期待である。しかし、切明さんは『「広島の復興は世界の紛争地などの復興のモデルケースになる』などという言葉を目にすると、『それは違う』と思ってしまう」と彼女は言う。そして、彼女は続け

て「もちろん、あの廃墟からここまで街を建設したことはすごいことでしょう。しかし、『素晴らしく復興した』なんていわれますとね、大きな問題が大きなもので、覆われてしまっているような気がするんですよ。『本当は何も解決していないのではないか』という気持ちになるのです」と述べた。例えば、現在も世界に核兵器があり続けていること（それも大量に）⁷が、「何も解決していない」という気持ちを惹き起こしている。

『立派に復興した』といわれる広島の街を見て、どう思いますか」という難問を、彼女に問うてみた。

彼女は平和記念公園を見下ろす場所に2016年に開業した「おりづるタワー」に登って、街を見渡した時の感想を語った。「ビルがいっぱい建ってぎっしりと埋まっています。あのいくつものビルが墓標に見えました。あのビルの下に何人のお骨が眠っているのだろうと思っていました。平和公園は、巨大な墳墓です。白骨と瓦礫の上に土をもって、作った公園です。今となつては、そのお骨を掘り起こしてご供養する術もないんです。本当に悲しいことです。これで『復興した』ということ、あの人たち（死者たち）は喜んでくれているのか。そればかりを考えてしまいます。」

広島が「復興していない」とは彼女もまた言わない。しかし、「復興した」という一面のみが前景化されることに対し、彼女は困惑し、腑に落ちないものを感じている。それは、私の、あるいは〈私たちの復興〉ではない、と。そして、そうではない〈私たちの復興〉が描かれることに、希望を抱いているのである。

4 切明千枝子さんにとって復興の意味するもの

「はじめに」で筆者は本稿の課題を、「切明さんが発した『私たちの復興』という言葉を手がかりに、彼女の個人史を描きつつ、個人にとっての復興、被爆者にとっての復興とは何か、主体（主語）を明確に据えたうえで復興の内実を考察すること」と述べた。そして、「その考察は、彼女と筆者との間でなされた相互的な応答により形作られたものである／となるだろう」とも述べた。

では、本稿で紹介した切明さんの諸々の発言を、「復興」とくに〈私たちの復興〉という点に即して整理するとどうなるだろうか。

第一に言えることは、「復興とは何か」を語る

にあたって、先行研究の研究者たちが主として対象にする「復興」と、切明さん（そして生活当事者としての被爆者たち）とが捉える「復興」との間に乖離があるということだ。先行研究では広島という都市がいかに再建されてきたのかを都市計画という観点から把握し、その面から「復興」を捉えがちであった。しかし、切明さんの発言に見られるように、生活当事者たちにとっては、毎日を生きていくこと、再び自分たちの日常生活を取り戻すことが日々の課題であり、彼女ら自身が都市計画そのものに関心を向ける機会はあまりなかった。都市計画の側からしても、その立案に個々の生活当事者が参画することは想定の外であったろう。ここに都市計画史としての広島の「復興」が、生活当事者としての被爆者にとっての「復興」とピタリと重なるものでなかったことが見て取れる。（更にいえば、被害の当事者でありながら、都市計画の「復興」を担う中心的役割から外されていたことも指摘し得る。）

第二に、それでは切明さんたち生活当事者としての被爆者たちにとって、「復興」とは何だったのか。これまでの聞き取りの記録から明らかなのは、（少なくとも現時点では）「復興とはこうである」という言い方では描出するのは困難であり、むしろ「これは、復興ではない」という否定表現を通じて間接的に接近することができるものと捉えられる。

具体的に確認してみると、例えば切明さんは、広島の戦後復興が世界の復興のモデルケースになるという議論について「それは違う」と述べている。ではなぜ、「そうではない」と思うのか。切明さんの発話からは、3つの理由を読み取ることができる。

1点目に、「復興」という掛け声が後ろに置いてきた者たち＝死者たちの存在がある。切明さんは「平和記念公園の石畳の上を歩く度に、『ごめんなさい、ごめんなさい』と心の中でいいながら歩いている」と筆者に打ち明けた。原爆後、至るところに多くの遺体が山積みになっていたこと、それを次々と機械的に焼却し、埋めていったこと、家族全滅という状況もあり、どこの誰かも分からないまま遺骨が放置されていたこと。そのような死者への「供養」がいまだしっかり果たせていないと、彼女は自責の念を抱いている。この死者たちの「供養」を置き去りにした街を「復興した」と見なすことに対し、「それは違う」と感じるの

である。

2点目に、核兵器がいまなお世界に君臨している状況である。世界はいまなお核兵器の存在に、そして原子力発電という核エネルギーの存在に脅かされている。広島や長崎の被爆者の体験は果たして生かされているのか。核兵器が廃絶されなければ、被爆を原点とする諸問題は「何も解決していない」という思いを、切明さんは抱えている。核問題を残したままの世界で広島は「復興した」のか。ここにも「それは違う」という感情が存在する。

3点目に、現代において人びとの命の尊厳が守られているのか、という懸念である。切明さんは、被爆へと至る戦中の体験を語る中で、幾度も「命が軽く扱われていました」と述べ、この点を問題として挙げていた。戦中、命は「鴻毛の軽さ」に譬えられ、「国民の命は吹けば飛ぶように軽く、お国のために差し出すことをためらってはいけない」と教えられていたという。では現代はどうか。現代もまた、命を軽んじる意識が日本で、世界で、残っているのではないか。ここにも「それは違う」が存在する。そこには、戦中において彼女が「軍隊式の暴力」に抗うことなく、「軍国少女」として過ごした日々への反省がある。

このように、切明さんは、「復興」に対し「それは違う」という否定表現で「復興」を表現したのだが、これらのことは全て、広島の「復興」という問題を現在も未解決の課題の中で捉えようとする切明さんの態度から導かれたものだと言える。このことは、彼女の証言活動を支えている。彼女が自らの被爆体験についての証言活動に取り組んでいるのは、いつ戦争が起きてもおかしくないような現代の頼りなさのためである。彼女はこう述べる——「再び戦争が起こって、若い人たちを戦争なんかで死なせてなるものかという思いで証言活動に取り組んでいる」こと、「大事な、大事な、たったひとつの命です。かけがえのないものです」、「戦争は人間の心の中で行われているものだと思います」、「平和は座っていたら、向こうからやってくるものではありません。考えなくなったとき、黙って座っている間に、どんどん戦争のほうへ引きずり込まれてしまう。だから、しっかりと自分が考えることを言葉にして話していかなくてはならないと思っています」。

第三に、このような「復興」に対する〈私たちの復興〉とは、どのように捉えられるのか。すで

に述べたように、〈私たちの復興〉とは、筆者と切明さんとが何度もやり取りをし、否定表現として「復興」を捉え、さらに相互の応答を続ける中から生じた言葉である。だが、この〈私たちの復興〉という言葉と、それに導かれる歴史叙述は、まだその具体的内実を欠いている。それは、本稿で示すことのできなかつた切明さんの戦後の諸活動についての歴史の断片をつなぎ合わせて行くことで、徐々に示されるであろう。そして、それは戦中への反省という一人の意志からはじまる、平和や民主主義の理念を根底に据えたものとなるだろう。

5 おわりに—あらためて切明千枝子さんとお話し、今後の課題を確認する

以上、切明さんの個人史から「復興」そして〈復興〉を捉え返す作業を行ってきたが、最後に本稿に関する切明さんと筆者との最終段階でのやり取りを挿話的に紹介し、今後の課題を示すことで本稿を閉じたい。

本稿を準備する最終段階で、筆者は、発言内容や意図について誤りの無いようにするため、草稿（ほぼ上述した内容）を切明さんに送り、確認を依頼した。彼女からの返信には、事実関係の修正と共に、手紙が同封されていた（なお事実関係の修正は本論に反映されている）。その手紙には、復興について次のように記されていた。：「広島市の街も立派に『復興』しましたが、心の傷までは仲々元には復しませんね。75年も経ちましたのに——。戦争を知らない世代の人々ばかりになった時に、初めて復興したと言えるのでしょうか？それもちよっと違う気が致しますね。」「追伸。復興って、建築や施設などの箱物が立ち並ぶよりも、その街の文化とか、人と人との関係とか、それらが立ち直り、前よりも、もっといいものになって、初めて復興が成就したと言えるのかな、などとなまじきなことを思いました。教育も含めて。」

手紙を読んだ筆者は直ぐに切明さんへ電話をした。切明さんは、電話口で、「どんなに立派な建物が立ち並んでも、心の傷は癒えていない」、「広島が立派に復興した、復興は済んだ、と言われる度に、心がズタズタになりました」と心境を語った。切明さんの電話越しの震える声を受けとめながら、これまでの広島市の「復興」をめぐる議論が、生活当事者としての被爆者不在のものであったことを（あらためて）痛感した。広島市の「復興」の内実

を被爆者の戦後史の中から読み解く必要がある。被爆者が語る〈私たちの復興〉についての歴史叙述は、本稿で描いた切明さんの戦後史の一部から思いを巡らせるならば、暴力によって非人間化された人間が、人間的で豊かな生を取り戻そうとする営為として描写されるものとなるだろう。

切明さんは、電話での会話の最後にこう述べた。「復興を議論するうえで、思想を抜きにしてはならないと思います」と。被爆者の思想を踏まえた復興論、それが〈私たちの復興〉を描くために、あらたに筆者に要請された課題である。

謝辞

本稿は、32回に及ぶ聞き取りに根気強く応じ続けてくださった切明千枝子さんの存在なくしては成立しませんでした。切明さんに心から御礼を申し上げます。

注

1 石丸紀興「広島における計画思想としての平和記念都市の形成過程とその変遷・変容に関する研究」（『都市計画別冊 都市計画論文集』第43巻3号、2008年、所収）。

石丸紀興「広島市の戦後復興における計画思想としての平和記念都市の提案・形成・成立過程に関する研究」（『広島平和記念資料館資料調査研究会研究報告』第8号、広島平和記念資料館資料調査会、2012年、所収）。

2 中谷礼二「場所と空間 先行形態論」（植田和弘、神野直彦、西村幸夫、間宮陽介編『岩波講座 都市の再生を考える 第1巻 都市とは何か』岩波書店、2005年、所収）。

3 米山リサ『広島 記憶のポリティクス』（小沢弘明、小澤祥子、小田島勝浩訳、岩波書店、2005年）。原著は1999年。

4 仙波希望「「平和都市」の「原爆スラム」戦後広島復興期における相生通りの生成と消滅に着目して」（『日本都市社会学年報』第34号、2016年、所収）、西井麻里奈「広島平和記念公園の形成史と住民立退き復興事務所資料からみる人びとの経験」（『歴史学研究』第988号、2019年、所収）。本稿を脱稿した後に西井麻里奈『広島 復興の戦後史』（人文書院、2020年4月）に接した。詳細な言及は避けるが、本書も「復興」過程の力学を描いたものである。

5 桐谷多恵子「戦後広島市の復興と被爆者の視点——『中国新聞』の記事を資料として」（『異文化 論文編（法政大学国際文化学部）』第7号、2006年、所収）、「戦後広島復興」における青年運動に関する覚え書き——宍戸・勝丸両史料の批判的考察に寄せて」（『法政大学大学院紀要』第59号、2007年、所収）。なお、長崎については桐谷「浦上の「受難」と「復興」における文化の存続——キリスト教修道士・岩永富一郎の活動を中心に」（『インターカルチュラル：日本国際文化学会年報』第18号、2020年3月、所収）も参照されたい。

6 〈私たちの復興〉を本稿のキーワードとして練り上げる過程で、研究仲間の福島在行さんより貴重な助言を頂いた。研究への助言と応援に感謝いたします。

⁷ 核兵器廃絶長崎連絡協議会 (PCU・NC)・長崎大学核兵器廃絶センター (RECNA) 発行『世界の核弾頭データ解説しおり』(2019年6月版)によると世界の核弾頭数は13880発とされる。彼らは毎年、世界の核弾頭数を推計・発表している。

参考文献(五十音順)

- 井上亮『焦土からの再生 戦災復興はいかに成し得たか』新潮社、2012年。
宇吹暁『ヒロシマ戦後史 被爆体験はどう受けとめられてきたか』岩波書店、2014年。
広島市企画調整局『都市の復興 広島被爆40年史』広島市、1985年。
広島市『広島新史 資料編Ⅱ 復興編』広島市、1982年。
広島市『広島新史 市民生活編』広島市、1983年。
広島市『広島新史 都市文化編』広島市、1983年。
広島市『広島新史 歴史編』広島市、1984年。
ノーモア・ヒバクシャ継承センター広島『切明千枝子 ヒロシマを生き抜いて』2019年。
米山リサ『広島 記憶のポリティクス』岩波書店、2005年。